



2019年度 生物学功労賞 受賞

受賞にあたって

公益財団法人 野田産業科学研究所 専務理事 今井 泰彦



この度、第13回生物学功労賞という名誉ある賞を頂き、身に余る光栄と思っております。これもひとえに、諸先輩方や、学会役員の方々、そして現在も一緒に産学連携活動を進めてくださっている皆様方のご指導と、ご支援の賜物と大変感謝しております。受賞対象となった「未来社会を先導する技術開発研究の実現を目指した産学連携活動への貢献」は、私個人と申しますよりも、これまで一緒に産学連携を進めてくださいました皆様方を代表して頂いたものと考えております。この栄えある賞を励みとしまして、今後とも学会の発展に貢献できますよう微力ながら誠実に努めて参りたいと思います。

現在まで、ずいぶんと長く学会活動をさせていただいており、これも授賞の理由の一つかと思いますが、私自身は学会に大変お世話になった恩返しと思っております。そこで、少し、私と学会の関わりについてお話しさせていただきます。

1980年にキッコーマンに入社し、初めて参加させていただいた学会が、醗酵工学会の年次大会でした。まだ大阪中之島にあった日本生命の研修所で開催されていた頃で、小さな会議室に大勢の聴講者がいて、どこの会場も、熱気が溢れていました。宿泊は研修所の上の階の個室で、朝は食堂で一緒に朝食を摂り、その後は会議室で研究発表を聴講する、まるで合宿のような学会でしたが、著名な先生方や発表者の方々をすぐ側でお見かけすることができる、若手にとってはとても貴重な場所でした。その後、発表の機会も何回か頂きましたが、必ずと言って良いほど著名で厳しい先生方がいちばん前にお座りになっていて、鋭い質問や的確なコメントを矢継ぎ早に出されることから、発表はとても緊張感のあふれるものだったことを懐かしく思い出します。発表の準備中に資料をまとめることで新たな発見があったり、発表時の質疑応答が次の仕事につながったりしたこともあり、私としては学会、とくに年次大会は社会人である私自身を大いに成長させてくれた、とても有り難い場でした。

このような場を提供していただいた学会には大変感謝しておりましたところ、2003年、東日本支部に木野先生が支部長として着任され、先生の下で副支部長として活動をお手伝いすることになりました。木野先生は当時から産学連携をたいへん一所懸命に進められており、私も自然にその活動に参加させていただくことになりました。お陰様で、支部委員の皆様をはじめ、大学、公的機関、装置・機械メーカー関係者など多くの方々の協力を

得て講演会やパネルディスカッションを通じた活発な議論が行われ、交流することができました。そして、その後の広範囲な活動に発展したのは大変嬉しく思っております。

その後、2013年からは、学会本部の理事として再び学会活動に参加することになりました。園元会長、五味会長、木野会長の下で、産学連携活動をさせていただきました。特に、園元会長が提唱された「イノベティブな産学連携活動の推進」を受けて、大会でのシンポジウムを新たな切り口で進めることを心がけました。学会員でない産官学の専門家に特にご講演を頂き、「食」を基軸としたシンポジウムや、「社会的課題の解決」をテーマにシリーズ化して会員の皆様に、これからの未来社会に向けた方向性を提供するよう心掛けました。

産学連携ではシーズとニーズのマッチングが必要ですが、生物工学会もかつての醗酵工学会から発展するにつれて、裾野がだんだん広くなり、かつてのように比較的単純にマッチングするのが難しい状況になっているかと思えます。産学連携は必要性があって行うもので、無理矢理できるものではありません。したがって、共有化できる場や、人と人が会ってコミュニケーションをとる場を提供する、ということが大事ではないかと感じています。そのためには、学会の大会になるべく多くの人が参加して、産学官でバランスよく発表を行い、話を交わす、そこからイノベーションのきっかけが生まれ、場合によっては連携が誕生したりするのではないのでしょうか。産学連携委員会ではそのような場づくりをこれからも進めていきたいと思えます。生物工学会は、学会の名称が醗酵工学から生物学に変わり、対象も微生物から細胞へ拡大する中でも、「発酵」という生物と人間を結び付ける、素晴らしい現象を通じて生まれた、風土や文化はこれからも引き継がれていくものと思っています。

私の上司はかつて『生物工学会誌』に寄稿した文章の中で、「生物学研究者は幸せである。40億年間生物が進化してきた中で、獲得、選抜し、蓄積されてきた巧妙な仕組みを分子レベルから細胞、組織、個体、さらに集団レベルで理解し、これを活用して人類に貢献しようという大きな夢を見ることができる人たちだからである」と記していました。この幸せな人たちの集まりである、生物工学会がこれからも着実に成果をあげて、社会に大いに貢献できることを祈念しています。